

「胡鐵梅」札記

——清末の一畫家と土佐の詩人達——

中村忠行

一

光緒二十二年（一八九六）、胡璋が夫人生駒悦（「えつ」ではなく、「みつ」と訓んだといふ）の名儀で、上海の租界で創刊した「蘇報」が、孫文の所謂「革命風潮初盛時代」に果した英雄的な役割については、更めて説くまでもない。もっとも、同紙が公然と革命を口にする様になるのは、光緒二十五年（一八九九）、胡璋夫妻が相繼いで歿し、「蘇報」も廢刊の餘儀なきに至つたのを、陳範が買ひ取り（光緒二十六年、一九〇〇）、やがて「愛國學社」の機關紙となり（光緒二十九年、一九〇三）、章士釗（行嚴）や吳敬恒（稚暉）などが主筆となつてか

らのことであるが、今は暫らく問はない。創刊されたのが、日清戦争（一八九四―一八九五）終結直後のことであり、夫人（日本人）名儀で發行されてゐること自體が、自ら同紙の性格を有力に物語つてゐると思量されるからである。

ところで、この胡璋については、諸書にその名を散見するが、まとまつてその人を語つて呉れる文献は殆んどない。神戸市追谷墓地に在つた當時の夫妻の墓については、有井基氏に「中國の画人胡鐵梅先生」なる文章があり、神戸日華實業協會發行の雜誌「日華」第十四號（昭和四十一年二月二十日發行）に掲げられてゐるが、これは單に墓の所在について報じた程度のものに過ぎない。僅かに、本岡三郎氏の好著「北方心泉（人と藝術）」（二支社刊、一九八二年）に、心泉由縁の文人として、特

に一節を削いて書家乃至は画家としての面を綴り、金澤の常福寺に遺る明治十五年（一八八二年）秋の撮影に係る肖像を掲げてゐるのが、注目される程度である。

私の拙いこの一文も、もとより胡璋その人の研究ではない。清末に於ける日中文壇の交流の跡を辿る道すがら、眼に觸れた資料を書き留めて置いたものが少しく體を為して來たので、一まつこれを附印し、大方の示教を仰ぐと共に、忘れられたこの文人を追弔し、鎮魂のよすがとするものである。

二

胡璋、字は鐵梅、號としても字をその儘に用ゐた。安徽省徽州府黟縣（黟城）の人。清の道光二十八年（一八四八）十一月十五日生れ、光緒二十五年（明治三十二年、一八九九）八月一日、日本の神戸で客死した。

彼の來日について、坂井犀水氏は「明治十一年（一八七八）來日し、數年間名古屋にゐた」（平凡社版『世界美術全集』第三十卷解説）とし、本岡氏も之に従ふが、何に據つたものか。明治十一年といふと、日清兩國の國交が開けたばかり、前年十二月二十八日に初代公使何如璋の國書捧呈があり、この年の一

月二十三日に清國公使館が、横濱から東京芝山内の月界院に移つて來て、本格的な業務を執り始めるのが実態だから、それは極めて早いことになる。もつとも、國交開始と共に、兩國文人間に友好親善の氣運が頓に高まつて來るのであるし、これ以前とて、例へば羅雪谷の如く、明治八年十月に來日し、東京は淺草寺門前に僑居し、指頭画を描いて評判であつた人物もあることなので、必ずしもこれを否定する者ではないが、疑問に思ふ。

管見に入つた最初の資料は、「樂善堂」開設の爲上海に赴いた岸田吟香が、明治十三年（一八八〇）三月三十日、成島柳北に充てて裁した書簡で、陳曼壽や胡鐵梅の渡日のことに觸れてゐる部分である。陳曼壽も、明治文壇には因縁淺からぬ人、珍らしいばかりでなく、後述するところとも若干關係があるから、少しく引いて置かう。

（前略）陳曼壽ト云フ蘇州人、今度日本へ參り候。暫ク京阪遊覽ノ上、東京ニ赴ク由。同人ハ可ナリノ學者ニテ、詩毛出來候。最モ隸書ト篆刻ガ長技ノ様子。東京ノ諸大家へ添書セヨト小生ニ頼ミ候間、宜ク御評判可被下候。曼壽ノ子ハ善福ト申ス、廿四五ノ男ナリ。娘ハ慧娟ト申シ、詩モ畫モ出來ル由、容貌モ美ナリトノコトナレド、小子未ダ面

セズ。曼壽ノ外、胡鐵梅ト云フ畫工モ近々日本へ金儲ケニ
出立スルトノ事。支那ノ文人ハ、日本へ往キタイ往キタイ
ト申ス者多シ。何デモ日本へ往ケバ金ガ儲カルト思フハ、
實ニ一笑ス可シ。鐵梅ハ、上海ニテ第三番ノ畫人、芋塊山
水モ可ナリニ出來、花卉モ出來候。當地ニテ山水ヲ全紙ニ
書カセ、洋銀二元ノ潤筆ナリ。花卉ハ、一元ヨリ一元半位
ト云フ。日本ニテ大層ナ法螺ヲ吹クモ知レズ、此段御報知
申ス。併シ是迄モ往キシ畫工ヨリハ少シク宜シカラシカ。
當地第一ハ張子祥、第二ハ胡公壽ナリ。其他、任伯年・楊
伯潤・朱夢廬等ハ、皆伯仲シタル者ナリ云々。

〔朝野新聞〕一九七〇號。明治十三年四月十三日

同じ書簡に、「此程當地本願寺別院ニテ承ハルニ、上海ニテ
書畫共日本人ヨリ頼ミ候時ハ、潤筆ヲ別段ニ高直ニ申ス由
云々」の文字が見えるところから推すと、吟香はこれらの情報
を、同別院から得たものか。陳曼壽に比し、胡鐵梅に少しく冷
淡であるのは、直接會つたことがない為であらう。

少し遅れて認められた「淡々社」即ち舊「一圓吟社」に充て
た書簡にも、陳曼壽や胡鐵梅に言及するところがある。この書
簡はかなり長文のもので、末は當時の上海の出版事情にまで及
び、内容も豊富、甚だ興味深いものがあるが、當面の課題の線

に沿つた部分だけを抜いて置く。

……此度、葉松石⁽³⁾又々東遊、今晚出帆ノ高砂丸ニ乗込ム様
ニ申居候處、旅費未調達セズ、今一船モ延期ノ由ニ御座候。
郭少泉ト申ス書家モ同行。此人ハ、揮毫墨蘭ヲ以テ門戸ヲ
張り候ヘドモ、別段有名なニハ無之、書家ヲ數フレバ、指
ヲ末ニ屈スル位置ニ御座候得共、性質温順ニテ人ニ愛セラ
レ、上海ニテモ同人ノ書ハ至テ多ク見受ケ申候。潤筆モ仿
單ヲ作ラズ、人ノ投ズルニ任カセ居ル様子ニ御座候。陳曼
壽ハ東京へ参リ候哉。猶又、遠カラズ胡鐵梅ト申ス畫家モ
東遊致候由ニ御座候。尤モ、此人ハ尾州へ語學教授ニ被雇
候由ニ承リ候。同人ハ有名ノ畫家ニ御座候間、何程カ日本
人ノ躰金ヲ攫取可致ト存候。郭少泉ハ、西京鳩居堂へ赴キ、
夫ヨリ東京へ遊ビ度ト申居候。葉松石モ多分同遊ト存候。
上海ハ至俗ノ地ニテ、文學ノ士ハ一向ニ無御座候。本地人
ニテ毛對山ト申ス七十餘ノ老人ノ外ニ、王某トカ申ス先生
有之候得共、大家ト申程ニモ無之由。蘇州・杭州・南京等
ニハ、經史百家ニ通ジ、詩文モ能ク出來候者モ、少々ハ有
之由ニ御座候。然ルニ、書畫ハ潤筆ヲ食ルガ為メニ、緑茶
富商ノ雲集スル上海ニ無之テハ不都合ト相見エ、追々各省
ヨリ筆硯ヲ携テ、吳淞江ニ來集スル景況ニ御座候。張子

祥・楊伯潤等ノ畫家ハ、晝夜筆管ヲ握リ詰ニテ、實ニ流行紺屋ノ形置キヨリモ忙敷様子ニ御座候。日本ニテ評判スル胡公壽ハ、支那ニテハ格別ニ譽メ不申、只々一通リノ畫家ニ御座候。元來、日本人ハ實ニ目ナク、耳ヲ以テロトスル方ニ御座候故、誰カ一二人公壽ガ畫ヲ持歸リ、自慢致シ候ヨリ、遂ニ胡ヲ以テ第一等ニ置キ候者ト相見エ申候。實ハ、張子祥ヨリ下ル事数等ニ御座候。第二ハ楊伯潤、第三ヲ胡公壽、其餘ハ胡鐵梅ヲ以テ頭トシ、朱夢廬輩ノ如キ数人ハ皆伯仲ノ間ニテ、王治梅ハ下等ニ可有之カト存候。云々。

〔朝野新聞〕 第二〇〇一號。明治十三年五月十九日)

二つの書簡を通して知られることは、胡鐵梅の名が、未だ日本の文人間に定着して居らず、吟香の紹介を必要としてゐる事實である。若しも、彼が明治十一年に來日してゐるのであれば、その器量からしても、日本の文人と没交渉であつたとは考へられぬ。にも不拘、管見の限りでは、その痕跡すらも見當らないのである。彼の來日は、明治十三年(一八八〇)を遡るものにはあるまい。

ところで、「淡々社」充の吟香書簡には、「陳曼壽ハ東京へ参り候哉」とあるから、それは陳の離滬後十日程して、投ぜられ

たものと見當がつく。その陳曼壽は、四月末日頃京は麩屋町なる俄屋に投宿した。偶々京都に遊び、菊池三溪や伊勢小湊などと舊交を温めつつあつた小野湖山も、同じ宿に泊つたから、期せずして顔を合せることになる。

一昨日、柳北ノ許へ寄セラレシ(湖山の)書中ニ云フ、寓居ニテ消客陳曼壽ニ邂逅ス。余、岸田吟香ニ逢フヤ否ヤヲ問フ。

陳生、直チニ袖中ヨリ吟香ノ添書ヲ出ダセリ。亦奇遇ト謂フ可シ。吟香ノ書ニ云フ。陳生隸書ヲ善クス。篆刻最モ其所長ナリ。文事モ術鑄生ノ右ニ在ル可シト。最晩、東京へモ赴クナラン。此事ヲ雅流ニ報ゼヨト。

〔朝野新聞〕 第一九八九號。明治十三年五月五日) 吟香が右の書簡を投じた時、胡鐵梅は未だ上海に在つた。しかし、「遠カラズ」渡日するであらうことは、吟香の口吻からも窺はれるところである。「尾州へ語學教授ニ」招かれたといふことも、「外國人雇入被取扱参考書」(自明治十年至明治十五年)によつて、愛知縣士族大澤五助(名古屋市名古屋區中之町五番地在住)から、「支那語學及ヒ詩文研究」の爲、同人を「明治十三年四月ヨリ愛知縣へ發足為致度」といふ(3)何書が、外務省に提出されてゐることが確認されるから、問題はない。問

題は、むしろ胡鐵梅の出發が、一月餘りも遅れてゐることにあらう。それは何故か。

按ずるに、上記大澤氏の伺は、容易に許可が下りなかつた。

のみならず、外務省は、同年四月二十一日、外務卿代理名で、

「海外ニ在テ外國人ノ^(ヲ)雇入、直ニ居留地外ノ場所へ相送り度儀ハ、本省^(ニ)於テ未タ適例無之」と、之を却下してゐる。この故に、「資料御雇外國人」は、結局「雇用されなかつた」とみられる」とするが、これには若干の説明を必要としよう。

當時、我國に居留する外國人に對しては「遊歩規程」なるものがあり、特別に許可された者以外は、居留地外に住むことが許されなかつた。しかし、外國人（主として歐米の）の中には、これに束縛されるのを嫌ひ、領事裁判の特權に隠れて、無法に振舞ふ者が尠くなかつた。明治十年三月十五日、寺島外務卿から若倉右大臣に提出された「私雇之外國人居留地外居住之儀伺ノ件」⁽⁴⁾は、その實情を、かう訴へてゐる。

華士族平民外國人ヲ雇入居留地外へ住居セシムルヲ許可スルハ、日本人民へ學術工藝ヲ傳習スルニ、雇主住國居留地へ隔遠ノ場所ハ、便宜ノ為其手許へ差置ン事ヲ願出ルハ、情實不得止筋ニ付、既ニ各府縣下居住人民へ許可ヲ與候儀ニ有之候處、東京府下ノ如キハ、内外狡猾ノ徒相互ニ申合、

居留地外ナル市街便道ノ處へ雜居ヲナスタメ、雇ノ名義ヲ假リ、正シク約定書ヲ作り、願出候者モ有之哉ノ由ニ付内探候へハ、其實眞ノ雇入ニアラスシテ、内國人ハ家賃地代等ノ潤澤ヲ食リ、外國人ハ雜居シテ商業ヲ營ムニ便利ナル為ニ仕做ス默策ナル由ニ相聞候。

國法を度にされることは、許さるべきことではない。まして政府は、この問題を不平等條約の撤廢に絡めて考へてゐるのであるから、輕々に黙視する訣にも行かぬ。寺島は訓令して、規則を嚴守すべきことを布告する。

今般、第二十七號ヲ以テ、私雇ノ外國人ヲ居留地外へ居住セシメント欲スルモノハ、本省へ可伺出旨布告相成候ニ付テハ、既ニ許可シタル分并以來願出ル分トモ、商業ノ顧問又ハ差配人、商法學研究等總テ物品賣買上ノ事業又ハ内外人民結社ニ類スル事務ヲ以テ願出ルカ、或ハ願面ハ右ノ事業ニアラストモ、實際商業筋ニ關係シタル雇入方ナル時ハ、居留地外居住ヲ許可セス、或ハ一旦許可スルモ隨時差止方ヲ、本省ヨリ府縣へ直ニ指令可致見込ニ有之候。然ル時ハ、居留地外へ居住ヲ許可シテ無差支分ハ、語學傳習・醫術治療、又ハ機械製造所ノ運轉、牧羊羊・本草或ハ農學ヲ實地ニ試験セシムル等ノ為、雇入場所居留地ヨリ格別懸隔、朝

夕通勤ニテハ時間ヲ費シ不都合ナルト見認候者ニ限リ、本省ヨリ許可ヲ與ヘ可申、其他ハ何様ノ事情申立候トモ、一切許可セサル方ニ確定可致ト存候。

と。大澤氏の申請が却下されたのは、正に之に觸れるものであったのである。

しかし、寺島自身も認めてゐる様に、「遊歩規程」には「曖昧ナ」點もあつて拔道も多く、又これを嚴守すれば、「後來處分ノ艱難ナル事モ可有之」と豫想されるところから、實際には便法も考へられたらしく、その為⁽⁵⁾に却つて矛盾や混乱も生じたものと思はれる。例へば、上記陳曼詩は、當初岐阜縣の市橋平助に招かれて來日したことになるが、來日後幾何もなくして本願寺の招請した語學教師で、月給は五十圓と沙汰されてゐるし、郭少泉も、同年九月には慶應義塾の中國語教師となつて、三田の福澤邸に寄寓し、食費の他に月三十圓が給せられてゐたといふ⁽⁶⁾。どうやら、雇主乃至は身許引受人が確實な場合に限つて認められたもので、國內旅行に必要な許可證下附の場合も、それに準じたものらしい。例へば、王治梅は、全く漫遊の名目で、明治十三年夏頃來日したものと見られるが、同年九月二日、葉松石・陳曼詩と共に、京都の「三橋樓」で、江馬天江・伊勢小湊・福原周峰などと詩酒角逐してゐるし、王泰園は

既に知名度が高かつた為か、容易に許可證を手に入れた様で、明治十五年五月から十七年にかけて、東海道・北陸・羽越地方から函館・佐渡へと旅し、十八年夏からは西下して、山陽道・四國・九州と、全國を隈なく歩いてゐる⁽⁸⁾。大澤氏は知名度も低く、かうした事情にも餘り通じてゐない人であつたらう。

それはともかく、本來、雇傭と渡航とは、別個の問題である。此處まで事が運ばれて、揚句の果てに、渡日を断念せざるを得なかつたとも考へ難い面がある。ましてや、當時上海では、紡織・製茶とも業界は不振で、流寓する文人や書畫家の潤筆も思はしくなかつた。其處へ、衛籍生の様な怪しげな書家が日本に赴き、僅かに半年足らずで数千金を獲て歸つたから、爆發的な日本漫遊熱が起つた(柳北充・吟香書簡)。——さういつた時代である。今、筆者の手許には、これに答へるに十分な資料がない。讀者は、暫く今後の調査を俟つ雅量を有せられたい。

三

胡鐵梅が、再び日本を訪れる機會に恵まれたのは、光緒八年(明治十五年、一八八二)のことで、これには何等かの意味で東本願寺上海別院が關係してゐたらしい。北方心泉が埠頭まで

見送ったことが、心泉の「月莊吟稿」に收める七絶

在滬送胡君鐵梅遊我國

別君痴立滬江灣。

目送煙波淼々間。

行脚十年遊未倦。

隨人一夢到家山。

よつて知られ、本岡氏も之を指摘する。

來日した胡鐵梅は、大阪の東本願寺難波別院に居を定め、揮毫生活に入ったものと思はれる。同別院に併設された教師教壇では、明治十二年頃に「支那語教科」を置き、純南京育ちの汪松坪を招いて、語學教育に當らせてゐた。上海で北方心泉の片腕となつて働いた松林孝純や白尾一也・松ヶ枝賢哲などは、何れも此處で華語を學んだ人である。當時は、日本の中國語教育が、南京官話から北京官話へと移り変りつゝあつた時代であるが、識者の間には、例へば福澤諭吉の様に、貿易用語としては、却つて南京語の方が便宜であると唱へる人もあつた。事實さうした面のあることも否定出来ないで、當時大阪にあつた「亞細亞協會」からも数人の學生が本願寺の教壇に派遣され、共に學んだものといふ。汪松坪が何時まで在任してゐたかは審らからないが、彼はずつと別院で起臥してゐた。胡鐵梅も或いは彼を援けて語學教育乃至は詩文教授に當つたことがあるかも知れない。

かくて一年餘り、胡鐵梅の動靜は殆んど訣らない。僅かに、陳曼壽や王治梅など、東本願寺上海別院と關係があつた人々は、いちちやく連絡を取り合つたらうこと、神戸領事館に在つた黃吟梅、神戸在住華僑の有力者鄭雪濤や詩文にも通じた胡蘓（小蘓）などは、面識を生じたこと、名古屋に航して（東海道線は未だ京都まで開通してゐない）前記大澤氏に會つたことがあるかも知れないといったことどもが、想像される程度である。しかし、明治十七年（一八八四）にもなると、岡山の森琴石・徳島の大津某といつた日本人壽家の門弟も出來、初夏には近江八幡に、秋には吉備・播州にと、慌しく揮毫の旅を續けたことが知られ、生活も漸く軌道に乗つて來た印象を受ける。

一方、上海に在つて、東本願寺別院の經營に惡戦苦闘してゐた北方心泉は、遂に肺患を病み、明治十六年三月離滬して、長崎で療養生活に入つたが、漸次健康も回復して來たので、十七年春京都に戻り、本山に復命すると、四月十八日金澤の自坊に歸つた。心泉が、乾坤二帖に裝潢した念曲園の尺牘を、見舞に來た胡鐵梅に示し、序を請うたのはこの時で、序の末には、「中華胡鐵梅識於京都客邸、時光緒十年三月」とある。三月は、勿論舊曆で、新曆では三月二十六日から四月二十四日までのこととなるが、心泉の動靜や後述する胡の水越畊南訪問を考へ併

せて、四月二日以降十七日までのことと、限定して考へることが許されよう。因みに、この「曲園太史尺牘」は、今日尚金澤の常福寺に製藏されて居り、本岡氏の前掲書には資料として寫眞版と、吉田三郎氏の譯文とが收められてゐる。尺牘の大半は、「東瀛詩選」の編纂に纏はるもので、日中文壇交流史上稀有の貴重な資料である。

却説、これより前、徳島の大津某が胡鐵梅の寓居を訪れ、餘り經濟的に豊かでないのを見て、阿波への一巡を懇めた。早速、正規の手續きを取ったが、なかなか許可が下りない。偶々、紹介する人（恐らく、黄吟梅）があつて、胡鐵梅は神戸に水越成章を尋ね、助言を仰いだ。

水越成章、字は裁之、號は畊南、播磨の人。舊幕姫路藩の藩學であつたが、維新後上京して太政官に出仕し、やがて司法官となつて、岡山の裁判所に勤務すること数年、明治十年十一月その本廳たる神戸裁判所に移つた。彼は若くして詩を善くし、在京の頃は、大沼枕山の「下谷吟社」にも出入してゐたから、官界のみならず、文壇にも馴染の多い存在であつた。初對面の畊南に、胡鐵梅がどの様な印象を持ったかを窺はせる資料がある。

畊南尊兄先生執事。昨日得瞻

風采、頓慰夙懷、臨行蒙贈

大著、歸途展讀、口齒生芬。母恠乎黃吟翁稱讚大才不去口。

實弟之相見恨晚矣。昨莫間、敝門人大津氏從德鳴來、視予

起居、并有意招弟阿波一遊、欲訪胡小頑兄之例、於兵庫縣

廳、申請外務省免狀、應如何辦理、敝門人不能明晰之處、

敬求

指示迷途、不勝感戴之至。秋間播州之游、有吾兄大人為之

經營、必勝於尋常周旋者十倍矣。引領以俟。先陳謝

盛情。拙作山水、聊以補壁、不足百筆墨也。祈

笑納之為幸。此致并請

吟安。

弟胡璋頓首 甲申四月一日

〔翰墨因緣〕卷下

畊南が贈つたのは、岡山時代の詩を輯めた「薇山摘葩」二冊（明治十四年二月刊）であらう。「歸途展讀、口齒生芬」といふのは、儀禮的な追從でもあらうが、「實弟之相見恨晚矣」といふのは、本心であつたに相違ない。その畊南に酬する

敬和畊南老詩盟原韻、即折正句

菲才徒為利名編。 寶樹風前借一枝。

却喜鹽壇逢健將。 翻嘲風婦倒朝兒。

匠心慘淡何其苦。 火候工夫祇自知。

更約神山重剪燭。 訂交猶悔十年遲。

と合せてその心境を窺ふべく、かたがた畊南が如何に親切に應接したかも知るに足る。

「翰墨因縁」には、右に引續く三通の書簡と、詠物詩

松

鐵爪蒼髯氣絕倫。

霜皮兩幹見精神。

輪囷自老烟霞裏。

不管人間秋與春。

楓

殘霞一抹鬧棲鴉。

點綴鄉村八九家。

不是停車貪暮色。

老來冷眼厭看花。

二首を取める。詩は、何れも畫讃として用意されたものであらう。

書翰三通の中、年月を記さぬ一通は、近江八幡へ旅する直前、京都から發信されたもの。大津某が畊南を訪ね、胡鐵梅の阿波漫遊につき、種々助言を得たことに對する禮狀である。

この遊歴から、胡鐵梅が大阪に戻ったのは、新曆八月も半ばを過ぎてからのことらしい。留守中、畊南から「文集」三冊

(書名未詳)が送られて來てゐたが、ゆっくり讀む暇もなく、岡山に遊ぶこととなつた。歸途は、播州一圓を歩きたいので、受贈本の謝辞かたがた同地方の數寄者に重ねて紹介を乞うたの

が、七月十五日(新曆では、九月四日)附の書簡で、連絡先として、岡山縣備前岡山區宇新西大寺町の西尾小竹堂を指定してゐる。凡て森琴石の周旋するところであつたらう。

畊南は、早速手配すると共に、胡鐵梅にも返書を認めた。七月二十六日(新曆、九月十五日)附の胡の書簡には、「昨日快讀華翰、不勝之喜、足徵高誼於我何厚若斯也」とある。岡山縣下に於ける胡鐵梅の足跡は、味野から玉島の方にまで及んでゐるから、帰途播州路に入つたのは同月末か十月に入つてからのことであつたらう。

後年、胡鐵梅が「蘇報」を創刊した時、精神的・經濟的に畊南が支援したことは、知る人ぞ知るところである。二人の友情は、この様にして始まつたのである。二人の間には、尚多くの書簡が交されたに違ひない。「翰墨因縁」にそれを取めないのは、同書がこの十二月十五日上梓された為である。

四

胡鐵梅の徳島紀行が容易に認可されなかつたのは、當時の日清兩國間の政局に關係があらう。修交條約・通商章程の締結、批准交換も済み、柳原前光が清國駐劄特命公使に任ぜられて、

北京に我が公使館を開設するのは明治七年七月のことであるが、同年はやくも、琉球藩民遭難事件に端を發した「征臺の役」が起る。翌八年には「江華島砲擊事件」が發生、何如璋の國書捧呈後も、「琉球問題」(明治十二年)で悶着が起り、餘燼は長く熾り續ける。殊に、韓國京城に於ける「壬午の変」(明治十五年、一八八二)・「甲申の変」(明治十七年、一八八四)と、再度に互る武力衝突は、遠からぬ裡に對決の日を迎へるであらうことを、豫測せしめるものであった。これより前、兩國は互に密偵を放つて、相手國の國情を探ることも努めてゐる。民間の友好親善の空氣とは裏腹の行爲ではあるが、國境を構へる以上、亦止むを得ない。その邊りのことは、實藤惠秀・佐藤三郎氏の研究に詳しい。佐藤氏も指摘する明治十六年一月八日の「郵便報知新聞」の次の記事は、「壬午の変」以後、我が國民が如何にこの種の問題に神經質になつてゐたかを端的に示すものとして、注目に値しよう。すなはち、同紙は、當時の「清國政府の舉動」を傳へて、次の如く報じてゐるのである。

同國政府は、早晚我政府へ向ひ、琉球事件の談判に及ばん意なるも、頻年多事なるを以て因循に附する様に思ふ者もあれど、同國の氣風として、事を急速にせず、漸次歩を進むる有様にて、聞く處に據れば、同國の文人墨客なりとて

頻々我國へ渡航し、名區勝地を探る為など稱し、内地を周遊する者の中には、其筋の内命を受け、我地理・風俗・人情等の探偵に奔走する者もありといひ、又横濱などに住する清國人の中には、軍事に必要な我地理圖を得んと切望する者もあるは、疑はしき事なりといふ。⁽¹¹⁾

これは、ほんの一例に過ぎず、同類の記事は、日刊紙上に屢々見るところであつた。かの王荊園の如きも、間諜かと疑はれ、明治十八年廣島縣の竹原を訪れた際、款待の中心となつた頼俊直(廣島大学名譽教授頼桃三郎氏の家殿)が、後日警察に呼ばれ、種々訊問を受ける一幕もあつたといふ。胡鐵梅が、岡山の旅先から水越畊南に充てた七月廿六日(明治十七年九月十五日)の書簡に

再懇者、該處之警部官、吾兄大人可通聲息否。如係相知、亦祈函託照應、不然恐有齟齬云々

とあるのも、末に「大審拜讀。清辭麗句、佩服之至。惟稍涉卑驟、如吾兄大人之英才駿發、何有不平、毋乃託興耶」と、後から贈られた文集の讀後感を書き綴つてゐて、どうやらこれを持ち歩いてゐたらしいことなども、萬一の場合に備へての用意と思へてならぬ。彼が「公使館學生」の資格を得た(本岡氏、前掲書)のは、かうした煩はしさから遁れる為であつたに相違な

いが、この時分は、未だそれを得てゐなかつたものと見られる。それはともかく、かくて胡鐵梅が徳島を訪れたのは、明治十八年（一八八五）も夏頃になってからのことらしく、更に足を伸して高知を訪れてゐる。明治十九年春から夏にかけて高知を訪れた王泰園は、到る處で胡鐵梅の畫を見せられ、「蘭竹園」「山水園」「梅鷓園」などには、贊を求められてゐる。その一つ、

題鐵梅所作山水園 泰園

蒨屋荒涼老樹橫。抱琴人坐落花坪。

曲終日暮舟何在。記取思翁畫裏情。

野橋橫處水云深。小閣無人鎖夕暉。

近樹迷離微着霧。遠山縹渺半浮雲。

（一高城唱玉集）

には、三浦一竿が注して、「乙酉秋日、胡鐵梅來游吾土、多作畫圖。今有此題詩、令人併賞、具難得處」と記してゐる。乙酉は明治十八年である。徳島と高知の旅は、一連のものとして考へるのが穏やかであるから、逆算して右の様に考へるのである。勿論、高知は胡鐵梅にとって不案内の土地であるから、何人か紹介する人があつたに相違ない。が、誰が誰に紹介したのか

は、審らかではない。しかし、何れにせよ、紹介を受けた人が、田中璞堂・三浦一竿・宮地逸齋三兄弟の中の一人であるか、その周邊に在つた人であらうことは、想像に難くない。この頃の土佐畫壇の重鎮と言へば、名草逸峰・河田小龍・川村雨谷・足達石泉などが想起せられるが、その誰からでもこの三兄弟に結び付く。それ程、彼等は當代に於ける高知文化界の中心的存在であつたからである。

この三兄弟は、山内藩の儒醫田中文仙の子。文仙、名は壽、一名之壽、東渚・五畝桑者・生樂舎・風竹齋などと號し、天保十二年（一八四一）山内藩が醫學寮を創設した時、擧げられて講師となり、後に醫學司業役に進んだ人。その傳は、「江漁晚唱集」（明治四十二年八月刊）に附録する王泰園の「田中文仙傳」に詳しい。青年の頃、彼は長崎に遊んで蘭醫を修めたが、後、これを捨て、江戸に赴いて惠美三白の門に入り、生涯漢方醫としての道を歩んだ。又、彼は長崎遊學中、好んで同地の華僑と交り、詩を學ぶ傍ら書畫にも心を寄せ、一見識を持するまでになつてゐたといふ⁽¹²⁾。その血が、三兄弟にも強く流れてゐた。文仙の長男は璞堂で、幼名九一郎、後、修して正と改め、字して楽之、璞堂・唐谷逸士などと號した。彼は家督を嗣いだ、醫は修めず、帷を垂れて郷黨の子弟を教へてゐた。明治七年

(一八七四)十月小學二等助教を拜命、翌八年九月には準訓導となつて、「陶冶學會係」に任ぜられた。その頃、南町小學校の訓導に山本弘堂がゐた。彼は本姓重山氏、父祐徳は小兒科を専門とする町醫で、弘堂も最初は弘庵と稱して醫を業としてゐた。偶々安政年間江戸に下つて大沼枕山の「下谷吟社」に出入するに及んで、遂に杏林を去り、漢詩に没頭し、傍ら俳諧を嗜むに至つた。璞堂と弘堂とは竹馬の友であつたらしいが、やがて非常に刺戟されたものの如く、發憤して上京、勉學する傍ら森春澗の「茉莉吟社」や王茶園の「聞香社」に出入して、詩を學んだらしい。王茶園を高知に迎へた璞堂の詩に、「京城贈答太纒綿。屈指忽忽過六年」の句があるから、それは明治十三・四年(一八八〇—一八八一)頃のこととなる。以後、郷里に戻つて、一時は教壇に立つたこともあるが、晩年は専ら詩・書を友として日を送つてゐた。

次子一竿は、出でて三浦祐順の養子となり、その姓を冒した。名を漁と修し、字して子漁、一竿と號したのは、業餘に垂釣を道楽としたからである。彼は幼にして家學を受け、又、大町晩翠・西村西里に經史を學んだが、文久年中(一八一六—一八六三)更に長崎に遊んで稲部某に蘭書を學び、専ら砲術を習得したといふ。元治元年(一八六四)、藩兵に應じて京に上り、清

和院門を死守して力戦奮闘、嘉賞せられたことは、松岡毅軒の長詩に詠ずるところ、歸國後、文武館助教に任ぜられた。維新後は司法官となつて、高知裁判所の判事たること十有餘年、轉じて吾川郡長となり、明治二十七年(一八九四)退休生活に入つた。⁽¹³⁾

一竿も、もとより青年時代から詩を作つたであらうが、明治十六・七年頃、兄の璞堂に誘掖され、「新文詩」・「新々文詩」の誌友となつてから、璞堂以上に詩作に熱中し、奇思縦横、屢々森春澗・槐南父子を驚かす才華を見せた。

時に土佐の漢詩壇は、漸く寂寥の感を訴へ、土居香國編「錦繡城」(明治十二年四月刊)の上梓や小川吉之輔の編輯になる「珊瑚鞭」の創刊(明治十三年六月)當時に見られた活気は、頗る薄れつつあつた。後藤象二郎(亀丘)・谷干城(限山)・土方久元(秦山)・細川潤次郎(十洲)といった顯官は暫らく措くとして、岩村通俊(貫道)・古澤滋(介堂)・丁野遠影(丹山)・土居通豫(香國)・濱口貝徴(秋水)・岩崎君義(秋溟)などは、官途に就いてそれぞれの任地にあり、宇田友(滄溟)などは笈を負うて上京し、未だ學窓に在つた。又、坂崎斌(紫瀾)・宮崎富要(芙蓉・夢柳)は既に高知を去つて東都に活躍し、「土陽新聞」に残つた横山又吉(黃木)や竹内吉(峴南)

は論説の執筆に忙しく、大江卓（揚雀）や岩神昂（天遊）などは、出獄したばかりである。獨り、山口政徳（繁潤）が吟社を興し、雑誌「南海漁唱」を出したといふのが目を惹くが、この人は既に頽齡の筈で、雑誌も何時まで續いたか訣らない。

かくて、瑛堂・一竿兄弟が、前記山本弘堂や細川潜（錦浦）・渡邊水網（白鷗）・岡林德馨（謙山）・濱田貞（石軒）・橋本寛（獨醉）などと詩酒角逐するに至るや、季弟逸齋及びその雅友、未だ若かった横山董（夢香）・安並正晴（梅所）も之に加はり、忽にして高城詩壇に牙壘を築くこととなった。これらの人々のうち、細川錦浦は醫師、詩集「淚痕集」や「かぶら矢」に青春の情を歌った詩人池舉雨郎の父。その中島町の家は、もと田中家の屋敷で、庭に樹齡二百年と稱された老松が、幼年期を此處で育った瑛堂の心に強く残つてゐた。渡邊白鷗の詩は、野口寧齋の「百花欄」にも見えるから、槐南系の詩人である。本格的に學んだ人であるから、弘堂・一竿の詩ともども、垢抜けてゐた。岡林謙山（林謙山とも署した）は、何を業とした人か。その書樓を「夕陽紅半樓」と稱して、屢々會場に充てられた。横山夢香も醫師、黄木の兄である。安並梅所は古文に親炙した人で、漢文の教師として全國の中學校を歩き、大正九年東京で歿した。

季弟の浩は、砲術家官地を仲の養子となり、その跡を嗣いだ。幼名稔作、字して之春と言ひ、畫を名草逸峯に學んで、逸齋と號した。逸峯は京の醫師名草精庵の子、畫を十田海選に學んだ後、紀州熊野に籠居して修業すること数年、山陰・山陽・九州を遊歴して、維新後は高知城下帶屋町に定住し、畫壇の育成に盡した。逸峯は、明治十四年（一八八一）の「内國勸業博覽會」や翌十五年の第一回「内國繪畫共進會」で褒賞されてゐるから、腕の確かな畫人であつたと覺しいが、その推轡を得て、逸齋も明治十七年（一八八四）八月の第二回「内國繪畫共進會」に出品し、高知畫壇にその地位を確立した。同じ共進會には、別役春田や兵庫縣からは水越畊南の子松南も出品して、將來を囑望されるが、畊南と一竿とは詩の贈答はない。

春田は、本名俊男、後に備と改めた。彼は安政二年（一八五五）十月の生れ、逸齋は弘化四年（一八四七）十一月の生れであるから逸齋がかなり年長だが、これが機縁で親しく往復する様になつたらしい。春田は初め橋本小霞に學んだが、その歿（明治十二年）後、川村雨谷に就いた。雨谷は東京の人であるが、司法官として、明治二十年頃高知裁判所に着任するから、やがて一竿の同僚となつた訣である。雨谷は、餘技に南畫を描いて玄人の域に達し、高知畫壇に大きな足跡を残した。寺田寅

彦の父利正も、春田と共に彼に學んだ人である。春田の妻駒女は寅彦の姉だから、利正は春田の義父に當り、兩谷は春田の義弟で、三人は親戚關係に在った。

壬生水石門下の篆刻家で、日本畫も善くした學古齋尾崎方（逸岳）や同じく水石門の淺香潔（石帆）が、春田と親しかったことは贅するまでもないが、醫者で書畫を受した小松松月や瀧淵素石齋なども、時には彼等の詩筵に参加したものらしい。

王泰園の場合がさうである様に、三兄弟は胡鐵梅を迎へて、借樂公園（城址）に遊んで「咸臨園」に登り、「迎月亭」・「得月樓」・「松鶴樓」などに小宴を催し、吸江湾に舟を浮べ、桂濱に秋月を賞で、又、それぞれの家に招いて、詩酒歌を盡したことであらう。「高城唱玉集」に収める瑛堂の「游松鶴樓即事二律」には、自注して「去秋、與胡鐵梅游于此樓云々」とある。遺憾ながら手許の資料は未だ十分ではないから、その委曲を究めることが出来ない。

五

瑛堂が胡鐵梅に書を學んだといふのは、この時のことであら

う。胡鐵梅の書は、寫真版によつて僅かに數點を目睹するのみ、瑛堂の書も、「高城唱玉二編集」の「後序」によつて窺ふのみだから、黃嘴を挟む不倫は勿論避けねばならぬ。が、後述する様に、胡鐵梅は米芾・米元暉あたりから入つて、當時流行してゐた北碑派の影響を受けながら、自己の書風を築いた人であるらしい。とまれ、その書風が、瑛堂の眼には清新なものに映つたことは、確かである。

ところで、この當時は、明治の書道史の上から言つても、注目すべき時代であつた。巖谷一六・日下部鳴鶴・松田雪柯が楊守敬に傾倒し、北碑派の書法を問うたのは、明治十三年から十七年まで（一八八〇―一八八四）のこと。明治十年渡清した北方心泉が、俞曲園・王貽はじめ、胡鐵梅・陳曼壽・徐三庚・張子祥・楊伯潤・胡公壽・錢子琴・任伯年等々、數多くの碩儒・文人・書畫家と交り、北碑派の書法を會得して歸國したのが、明治十六年。心泉と前後して大陸に渡り、楊守敬の師事した潘存に就いて學んだ中林梧竹が歸朝して、旗幟を擧げたのが翌十七年のことである。かくて、明治の書壇は空前の活氣を呈し、市河米庵・卷菱湖・小島成齋など舊派に屬する諸派と、これら北碑派の新人とが屹立して譲らぬが、さうした空氣の反映が、邊陲とも言へる土佐で、しかも明治十八年といふ早い時期に見

られることは、興味が深い。

上記の如く、文仙の遺品には、長崎で獲た書畫が幾許かあり、胡鐵梅も示されて関心を寄せたことであらう。それと共に、文仙の血を享けた璞堂に、文人的風格が具はつてゐたことにも格別の親しみを覺えたかと想はれる。後年、璞堂の彈琴圖を描き、詩を題して贈つたことがあつた。

胡鐵梅畫余彈琴圖、題詩其上見贈。因次韵答謝、復賦此詩、以寄。

清間獨坐撫無絃。 形影相憐人若仙。

飛鳥寒林茅屋外。 風神一幅老耕煙。

〔江漁晚唱集〕附録)

胡鐵梅の原韻を審らかにし得ないのは遺憾であるが、恐らくは、璞堂を陶淵明に擬した詩であつたらう。檀那衆の心をくすぐる術は、流寓生活から得た智慧として、深く咎むべきでもない。蓋し、璞堂も胡鐵梅の人格を愛し、屢その畫を書齋に懸けて、心を遣つてゐるからである。「秋日間居疊韵」六首中の第二首

郊郭吟懷杜紫微。 溪山畫致米元暉。

述懷喜有新吟在。 道故偏憐舊識稀。

樹外風來雲影動。 書中秋冷瀑流飛。

晚窓無事聊思飲。 臥運家僮沽酒歸。

〔江漁晚唱集〕附録)

には、自注して「壁上掛胡鐵梅畫溪山瀑布圖」とある。因みに、この詩の起句は、胡鐵梅が、詩にあつては杜牧を、書畫に於ては米友仁を宗としてゐたことを、物語るものである。詩も梅圖を想はせて面白い。

璞堂が寛厚の長者であつたのに對し、一竿は才氣渾發、詩に執すること痴に近いものがあつた。胡鐵梅は、璞堂以上に一竿に共鳴するところがあつたに違ひない。高知を去る時、彼は「墨梅」・「墨竹」の二幅を一竿に贈り、

何時重握手。 別淚自紛紛。

對竹君懷我。 看梅我懷君。

盈鈔東海月。 聚散萬山雲。

只待秋鴻信。 掀天揭地文。

〔高城唱玉集〕)

の五律を添へて、騷歌となした。「梅」が胡鐵梅自らを、「竹」が一竿を意味することは、贅するまでもない。が、それにしても、何と情熱的な詩であることか。胡鐵梅の詩の中でも、これ程までに情熱的な詩は、珍らしいかと思ふ。

一竿も、亦容易に興奮から醒めなかった。

乙酉歲晚寄懷胡鐵梅

知君遊迹遍蓬萊。

安得重臨共把杯。

茅屋三椽依瘦竹。

湖村一徑探寒梅。

團團凍月隨人去。

耿耿清香撲面來。

風雪滿天遙悵望。

愁懷鬱鬱向誰開。

〔江漁晚唱集〕乾卷)

とあるのを始めとして、文通は晩年まで續く。それは、詩人一竿にとつてのみならず、胡鐵梅の思想遍歴の上でも、重要な意味を有つものとなる。胡鐵梅の高知訪問は、この時だけ、僅か一回に限られるのだけでも。以下、「高城唱玉二編集」・「江漁晚唱集」を主軸に、その描く軌跡を辿って見る。

胡鐵梅が高知を訪れた翌明治十九年（一八八六）五月、彼の身邊には歸化問題が起る。石川舜台の助言もあつて、胡鐵梅を東本願寺の僧籍に入れ、歸化させようといふので、北方心泉が奔走し、常福寺に隣接する木ノ新保五番町八十五番地に地所まで確保したが、故あつて、それは實現しなかつた（本岡氏、前掲書）。心泉の企圖が奈邊に在つたか、又この頃、胡鐵梅は既に「公使館學生」の肩書を有してゐたらしいが、それは何時かなど疑問は残るが、今は暫らく問はない。生駒悦と結ばれ、心

泉が縁談に何等か関係してゐたらしいことも想像されるが、一切は不明である。とまれ、胡鐵梅が、金澤を中心として、富山・高岡・七尾・小松・大聖寺・福井など、北陸三縣を歩いてゐたことは確實で、十月二十六日には、金澤の旅館淺田庄平方で盜難にも遭つてゐる。

詩人としての名も、既に擧つてゐたであらう。明治十八年大阪に於て創刊され、十九年第十集を以て廢刊となつた雜誌「熙朝風雅」には、黃吟梅と並んで「清客・胡鐵梅」の名が見えるといふ⁽¹⁾。筆者は未だこの雜誌を披見する機會を得ないが、小川果齋の編輯した雜誌で、作家としては、伊勢小湊・宇田栗園・菊池三溪・福原周峰・谷如意・江馬天江・草場船山（以上京都）・藤澤南岳・土屋鳳洲・小川果齋（以上大阪）など京都の詩人を中心に、大沼枕山・小野湖山・森春壽・森槐南など東都の詩人の詩を収めた異色ある編輯ぶりであつた。小川果齋は、後に名を木蘇岐山と改め、長く「大阪毎日新聞」の漢詩欄を主管して名があつた。早稻田派の文藝評論家木蘇毅は、岐山の嗣子である。果齋（岐山）は、もと東本願寺の僧大夢の子であるから、胡鐵梅のことも、早くから聞知してゐたのであらう。詩人胡鐵梅の名を明治漢詩壇に紹介した人として、忘れることは出来ない。

閑話休題、一方、明治十九年には、西日本漫遊の旅にあつた

王奈園が、高知を訪れる。「論東游中交情最洽者、於土州得一人、曰三浦一竿」(「江漁晚唱集」王序)と、奈園自らも記す一竿との交友は、此時に始まるが、それには別に稿を改めねばならぬ。王奈園は、續けて「憶余自丙戌夏、游土州凡二閱月、一竿無一日不來訪。來則必有詩、有詩則余亦必有和、以致土州諸同人。因余兩人之詩、亦各有和詩云々」と追想してゐるが、その間屢々胡鐵梅のことが話頭に上つたことは、既述の如くである。王奈園を送別する一竿の時も、上掲胡鐵梅の五律の韻を用ゐてゐる位であるから、消息は必らずや胡鐵梅にも傳へられたと思ふが、今は徴するを得ない。

翌明治二十年(一八八七)春、胡鐵梅は一時歸國した。一竿は書を認めて七律五首を送つた。

寄懷鐵梅在上海 (録二)

天南地北姓名馨。聚散匆匆迹若萍。

碧浪平分來去棹。綠楊遮斷短長亭。

宵聲夢覺雨初過。客路愁多酒易醒。

未免有情巴水月。重來肯叩舊柴扃。

杜鵑啼上棟花枝。荏苒駒光及夏時。

別久夢魂荼處苦。路遙書札到來遲。

橫琴默坐香三炷。對月閒吟酒一卮。

勝事關心忘不得。去年共賦惜春詞。

胡鐵梅の歸國は一時的なもので、同年中に再び日本に舞ひ戻り、初冬の頃には、神戸の華僑鄭雪濤の家に、一時食客となつてゐた。

鄭雪濤、名は柏年、字は旭松、雪濤と號し、道號として鶴桃の字を用ゐた。明治二十六年(一八九三)頃、選厝を迎へてゐるから、道光十三年(一八三三)頃の生れ、一竿とは相年か、雪濤の方が一歳年長であつたらう。原籍は廣東の人であるが、早くから神戸に來住し、「當港在留支那人ノ内是マテ總代相勤メ、……温和ノ人物ニシテ少々和語相通シ候」といふ兵庫裁判所からの申請で、明治七年(一八七四)九月から九年(一八七六)十一月に病を理由に退職するまで、神戸の裁判所で通辯・翻譯・書記の業務に携り、臨時に大阪裁判所の仕事をもち傳つた。その為人、飄々乎として仙骨を帯び、誰からも親しまれた。謂はば神戸の華僑の古老であつたから、劉壽鏗・廖錫恩・馬建常・黎汝桓など歴代の神戸領事からも重寶され、黄吟海・張宗良・楊錦庭などの隨員とも親しかった。就中、黄吟梅とは殊に親しく、明治二十二年(一八八九)雪濤が六甲山麓に宏壯な邸

宅「松澗書屋」を構へた時、黄吟梅の筆になる「神仙窟宅」の額が懸けられてゐて、名物の一つとなつてゐた。

その間歴からすると、一竿と雪澗とは、もっと早い時期から識り合つてもよいのであるが、昵懇になつたのは、明治二十年（一八八七）夏頃のことであつたらしい。一竿はこの春上梓したばかりの「高城唱玉集」に添へて、次の七律を、雪澗に贈つた。明春あたり、高知一遊を試みないかと誘ふ意圖があつたのかも知れない。

寄懷鄭雪澗

自憐家住綠楊澗。 獨坐披書畫掩関。

花似可人偏易老。 鳥能學佛亦多間。

一泓流水村前渡。 半抹斜陽煙外山。

惆悵伊人相去遠。 碧天只見白雲還。

雪澗は、これに應へて自ら和韻すると共に、子息の祝三や胡鐵梅・馬仿周・鄭颯萬・陶杏南にも唱和を求め、又、九月十四日の藍卓峰の招宴の席上でも披露して、徐橘孫・厲荔青・梁秋澄の和韻を加へ、馬仿周の揮毫する「時思」の周額を添へて、一竿に贈つた。

躡歩一竿原韻勉成一首即以寄意

雪澗 鄭柏年

天涯遙隔綠楊澗。 自笑琴書兩不関。

一片秋光容我懶。 無邊風景任君閒。

高城桃李聯詩社。 香谷芝蘭秀筆山。

欲訴衷情聊學句。 魚鱗鴈足幾回還。

次韵寄懷一竿 胡 鐵梅

放衙歸去白雲間。 鶴守柴門不用関。

五斗未拋三徑樂。 一竿常釣半生閒。

囊羞薄宦清於水。 書債攤牀疊作山。

快讀故人新脫稿。 心期漁唱幾時還。

次一竿韻 馬 仿周

君家深處桃源澗。 堪羨芳蹤隱抱関。

竹徑有時因客掃。 魚竿無事即身閒。

紅塵不到飛仙窟。 秋月常明碧玉山。

對此更應詩興滿。 羽書端望逐雲還。⁽¹⁹⁾

(自注)君詩有一鄉風景小桃源之句。⁽¹⁹⁾ (以下略之)

一竿は疊韻して、一人一人に之を酬した。原韻と合せると、同韻を重ねること十一首となる。この頃、彼は「次韻森春澗游南海二十首」や「送秦園歸鄉三十首」といった大作を頻りに作つてゐるが、驚くべき精進ぶりではないか。胡鐵梅・王秦園に親炙して、「和吳」を去る道を、自ら摸索し始めたに違ひない。

本稿の主題に則つて、今はその三首を引くに止める。

寄懷鄭雪濤在神戸

鏡水橋邊楊柳灣。 絕無佳客叩柴関。

光風霽月人安在。 破笠枯衰我獨間。

惟看波濤翻白雪。 欲披雲霧仰高山。

時時思得天涯地。 千里飛鴻幾往還。

(自注) 雪濤贈額仿周書時思二字、故及之。

疊韻寄懷胡鐵梅

斷葦枯澗澗復灣。 依然獨掩舊柴関。

去年別酒長爲恨。 何日傳杯又弄間。

千里孤篷來碧海。 五更殘夢到孤山。

冰肌玉骨難忘得。 探借春風放棹還。

疊韻酬馬仿周

溪居曲曲白雲灣。 隔絕人間毀譽関。

惟有棠梅眞品地。 從來泉石自清間。

絃歌帳裏三生夢。 雲樹天邊一株山。

獨坐茅檐斜日夕。 靜看暮鳥倦飛還。

馬仿周が高知を訪れたのは、「丁亥季冬」即ちこの唱酬があつてから一月ほど後のことであるが、明らかに之が縁となつたものであらう。馬仿周、名は仲頤、廣東省鉞城の人。詩を善く

し、書畫共に巧みであつた。高知には、翌二十一年晩春の頃まで、滞在してゐたらしい。璞堂の「弘瀬山舊游並序」(「江漁晚唱集」附録)は、遅れて明治二十一年六月十六日の「毎日新聞」第五二四八號「滄海拾珠」欄に、掲げられてゐる。彼は、この後京都に遊び、九州を歴游し、長崎に僑居すること五年、日清戦争直前に歸國するが、璞堂・一竿との文通は、その後も依然として續いた。

筆を原に戻す。心泉が胡鐵梅に「文字禪室記」の揮毫を依頼したのも、この頃であつたらう。「文字禪室記」は、心泉の囑に應じて三宅眞軒が撰じたもので、明治二十年十一月に成り、一四五〇字に及ぶ大文字であつた。鐵梅は報恩の念を籠めて、書丹した。端正な文字で書かれたそれは、額装されて、今日も常福寺の座敷を飾つてゐるといふ(本岡氏、前掲書)。これが完成すると、胡鐵梅は故國に旅立つた。今度は故郷に歸つて、餘生を樂しむ肚であるから、處々へ別離の挨拶をしたものと想はれる。一竿の詩に、

送鐵梅歸郷

不見君顔日悵然。 夜來時夢暗香傳。

窓含雲樹山如畫。 目送風帆水拍天。

修竹千竿撐勁節。 老梅萬樹樂餘年。

多情若得重相問。 依舊西江臥釣船。

がある。ここでも「修竹」・「老梅」が對して用ゐられ、忘れ得ぬ昔日の追憶を、齒の様な詩境の裡に甦らせてゐる。友を憶ふ一竿の情は濃やかで、夢にまで見る。

寄懷胡鐵梅在郷

深宵有夢到君家。 海路茫茫萬里賒。

月落參橫天欲曙。 起來忍凍看梅花。

胡鐵梅からも、音信はあつて、

和一竿寄懷韻

輕舟載酒向君家。 君有新詩酒便賒。

落葉打門成賦坐。 不嫌清澹似黃花。

寄懷一竿

年年海上閉門居。 風雨誰人可慰余。

竊喜良朋背厚祿。 天涯猶惡數行書。

と、和韻して来たり、恙なく暮してゐる様子を傳へて来る。が、續く便りの二首には、何か逼迫した感情が窺はれて一竿を驚かす。

山流浪浪雨聲酸。 餓溺為民父母難。

中野哀鴻登社席。 慈祥還伏讀書官。

震東曰、教民當急需儒、更不僮宰相、須用讀書人已也。○百

鍊曰、讀書官、自以致君澤民、為念

儒者行藏自有真。 幡然豈是為憂貧。

高風又見嵒溪老。 甫放漁竿便牧民。

震東曰、取語足徵人品高潔。百鍊曰、儒者行藏、自與俗吏不

同。

この二首には、梁震東及び黃百鍊の評が附せられてゐる。梁震東が高知を訪れたのは明治二十二年十月、黃百鍊は同二十四年のことだから、それ以前の作、誤りなくんば、明治二十一年のものであらう。この年、河北・山東兩省に大地震があり、又、永定河・遼河などの河川が決潰し、河南省の鄭州では洪水に見舞はれ、死者實に三五〇萬を算した。政府は救済の術を知らず、狼狽するのみ。又、時に、康有為は上書して、國家の危機を痛論し、日本の明治維新に倣ひ國政を革新すべきことを唱へるが、書生の論として省られず、彼は憤然として故郷廣東省南海縣に歸つて「萬木草堂」を興し、子弟の教育に専念する。胡鐵梅は、明らかにこれらのことに刺戟されてゐるのである。堯城は、直接洪水の被害は無かったが、餘波は及んで、物價は日々に高騰し、秋冬の候には飢饉さへ豫想されもした。胡鐵梅にとつては、最早餘生を樂しむどころではなくなつたらしい。彼は難を日本に避けた。それが、この年の裡であつたか、翌二

十二年（一九八九）春のことであるかは、確認出来ない。しかし、「新詩府」第四號（二十二年四月刊）に、

游日本寫懷 清客 胡鐵梅

羞將劍術抵諸侯。 濯足扶桑萬里流。

隻手擎來瀛海月。 一肩擔盡古今愁。

天狐賈誼三通策。 地起元龍百尺樓。

舉目滔々心北顧。 書生意氣壯神州。

が寄せられてゐるから、明治二十二年三月以前であることは、間違ひない。

因みに、この詩を評して、松村琴莊が「後半沈鬱悲涼、酷肖元好問」と言つてゐるのは、背後に時局を憂へ、悲憤慷慨する作者の姿を認めたもので、上の二首と合せて、この頃から胡鐵梅が時務に目覺めて行つたことを窺はせる。詩風にも少しく変化が認められよう。

越えて、重陽も過ぎた頃、一竿の許に鄭雪濤から一通の書簡が届いた。添へられた胡鐵梅の詩、

次一竿韻贈雪濤

神山兩度寄君門。 多謝臨岐把菊樽。

舊榻常懸懸待我。 結隣他日話黃昏。

を讀むと、神戸に来てゐて、又も雪濤の家に厄介になつてゐる

らしい。一竿は直ちに書を裁して、懷を七律に托した。

寄懷鐵梅在神戸

蓬萊處處舊游曾。 把取雲煙上剡藤。

四海良緣憐短髮。 一輪白日繫長繩。

鶴雛常伴林君復。 筆老應同王右丞。

悄坐樓頭情未盡。 何時繼咎剪孤燈。

前後して、雪濤からも「松濤書屋」が漸く落成し、引移つたと傳へて来る。とりあへず、一竿が、

雪濤在神戸新構吟窩。 顔日松濤書屋、賦此寄題

仙屋三間宅一區。 神門豈價甲江湖。

小窓人靜風靜大。 幽院宵深月影孤。

好與閑雲同冷淡。 不隨小草鬪荼枯。

寒燈別盡殘花落。 細細松濤沸竹爐。

と之を賀すると、雪濤に代つて胡鐵梅から、

次一竿寄題松濤書屋韻寄懷

秋老神山稻蟹區。 漫教歸思起尋湖。

行從舊徑尋鴻爪。 袖惹新霜染客鬚。

野鳥不遑忘羽倦。 好詩欲和愧鷓鴣。

閉門懷友心如渴。 且聽瓶笙臥竹爐。

と酬して來た。そして間もなく、「江山煙雨圖」を贈つて來る。

一竿は、

謝鐵梅惠江山煙雨圖

燈火分明素壁間。對君畫幅獨開顏。

依稀萬里扁舟興。看盡江南煙雨山。

を以て、これに謝した。

震東梁應龍が、高知に一竿を訪れたのも、この頃のことであらうか。疑ひもなく、鄭雪濤の紹介によるものであらう。震東の父梁徳修は、廣東省隆都の人で、字を敬學、仁山と號して、儒に詳しかった。久しく、神戸の華僑が子弟教育の爲めに建てた「龍山書院」に教へてゐて、震東も一時之に従つてゐたが、

歸國を前に、高知一遊を試みたものと想像される。彼は既に學士資格を得てゐて、詩は得意とする所であつた。震東に、

「森笑浦宛在亭八景和一竿韵」があることから推すと、一竿は震東を伴つて、森笑浦を訪ねたらしい。笑浦が折柄、御疊嶺に構へた新居「宛在亭」は、風光明媚な位置を占めてゐた。之を賞した一竿は、「笑浦夜雨」・「西法晚鐘」・「種崎晴嵐」・「浦門歸帆」・「棧島夕照」・「桂濱秋月」・「濠洲落雁」・「仁井暮雪」の八勝を撰んで詩を題したが、梁震東のそれは之に和したものである。一竿は又、詩稿の批を乞ひ、序を求めた。「江漁晚唱集」の梁序は、明治二十二年十月に撰せられてゐる。別離

に臨んで、瑛堂は、その家に百年も前から傳はつた室津の石の古硯を梁に贈つた。瑛堂の「贈室津硯詩并序」が、松野尾常行の「皆山集」第十卷（高知市立圖書館編刊）三六二—三六三頁に見えてゐる。なかなかの名文で、技量の程を窺はせるが、今は簡に従ひ省略する。

一竿は、又、胡鐵梅にも、詩集の序を求めてゐた。しかし、それは容易に果されなかつた。明治二十三年（一八九〇）春の一竿の詩、

春暮寄懷鐵梅

乍寒乍暖近清和。淡蕩春光奈老何。

花是美人顔色改。鳥惟蜀魄淚痕多。

穿窺翠掃成新竹。貼水青錢長嫩荷。

郵棹不來書信少。暮雲低壓萬層波。

を讀むと、口こそ出さね幾分か焦れてゐた様子が窺はれる。しかし、序文は既に成つてゐて、程なく一竿の手に落ちた。

三浦一竿先生、富於著作。刊有古城唱玉集、早已膾炙人口。

茲又彙近作二百餘首、附錄諸友原和韵上梓、名曰江漁晚唱

集。清響繼起、逸興遄飛、側耳雲濤、莫非天籟中、心洄潮

於蒼葭白露間、追尋泥爪天涯印證、煙波渺渺、難洗渴塵。

幸他日遣我一緜、挑燈朗誦、傑構層出拍案驚奇。竊窺鐵網

中、玉樹珊瑚、森羅萬有、寒乞兒傍拾遺珠、已足蠅蠅驅蠹矣。昔板橋贈隨園句云、君有奇才我不貧、契合之心古今同致、移作辨言。君其首肯。

光緒庚寅仲春堯城胡璋撰。

少しく餘談となるが、この頃から一竿と鄭雪濤との文通も、頻繁となる。「松濤書屋」の披露宴に、一竿は出席しなかつたけれども、宴の様子は一竿に細かく傳へられたであらう。「江漁晚唱集」に附録する徐廣坤の詩の中に、

雪濤新築幽居於神山之麓、名曰松濤書屋、友人黃吟梅顏其額曰、神仙窟宅四字、洵非譽語。越日、雪濤招飲、即

席賦贈

萬里鄉心逐暮鴉。 桃源小築擬仙家。
滿庭花落鳥聲碎。 半局棋爭客語譁。
黃菊傲人秋世界。 青山伴我酒生涯。
知君閱盡滄桑態。 老去青門學種瓜。

が見え、同じ韻を踏む鄭少鵬・鄭鏡華の「雪濤招飲松濤書屋」が、それぞれの詩稿中に取められてゐる。恐らくは、雪濤の次韻も示されたに違ひない。一竿に、

次雪濤韻

古樹蕭疏集晚鴉。 柴門半掩野人家。

窓前竹月明還滅。 天外松風靜不譁。

詩酒多情懷北海。 煙波老我住南淮。

年年濁釣寒江上。 一棹扁舟小似瓜。

があつて、明治二十三年秋の作とするが、その直前に、「次余兒璞堂韻、寄懷雪濤在神戸」を置いてゐることから推して、詩の配列に幾分か手を加へたものと想はれる。

因みに、右の徐廣坤、號して橘孫は、江蘇省吳縣（蘇州）の人、その詩句「家住江南消夏灣」に注して、「余家西洞庭山」と言つてゐるから、太湖に在つたものと覚える。第三代公使徐承祖の隨員として、光緒十年十一月（明治十七年十二月、一八八四）に來日し、第四代公使黎庶昌（第二次）の着任（光緒十三年十一月、明治二十一年一月、一八八八）時には、既に、神戸領事館に移つてゐた。「西翻譯」とされてゐるから英語を能くしたと思はれるが、詩も巧みであつた。鄭少鵬・鄭鏡華は、共に鄭文程の子。鄭文程は廣東省廣州府香山縣の人で、騶萬と號し、一に鶯石山房主人とも稱した。神戸の華僑中の有力者で、歴代の領事や黃吟梅・姚文棟とも善く、日本人では水越畊南と親しかった。前に、胡鐵梅・徐橘孫・鄭雪濤・陶杏南などと共に、一竿と詩を唱酬した仲間の一入である。

雪濤を介して、一竿の交友の輪は次第に擴がって行く。それと共に、「海東有畸人。自號為一竿。高風何所仰。云在巖陵灘。云々」(黄吟梅「庚寅秋七月客窓偶賦」)と詠ぜられる様に、その名は神戸の華僑間に定着する。

黄吟梅が高知を訪れたのは、明治二十三年七夕の頃であったが、この前後から高知を訪れた清國人は、次第にその数を増す。一竿とも詩を唱酬し、詩を評し合つた黄純金(號は百鍊。廣東の人)・劉鋼(號は瓊峰。廣東省隆都谿角の人)はじめ、一竿と交渉はなかつたが高知を訪れた人は、かなりの数に上る。「戊戌政変」に敗れて日本に亡命したかの王照(小航)の如きも、はるばる横濱から高知を訪れ、一竿と詩を作り交してゐる程である。

一竿が、雪濤を介して接觸した人々の多くは、又、胡鐵梅が雪濤を介して知り合つた人々でもあつた。そして、廣東系の華僑が多かつたことも、既に見た通りである。就中、鄭鷗萬の如き、孫文と同郷香山縣の人である。胡鐵梅は、彼等との交遊を深めるにつれて、益々、時務に目覚めて行つたものと見たい。

胡鐵梅が、最後に日本を離れたのは、明治二十三年(一八九〇)初秋の頃であつたらう。一竿の

秋日懷鐵梅

家僮含笑掃吟窩。料得高人渡海波。
鏡水橋頭秋未老。香魚風味至今多。

(自注) 鐵梅嗜香魚、故及之。

は、その歸國後程なく彼に寄せたものであらう。胡鐵梅は鮎が好物だつたと見える。「江漁晚唱集」には、尚

病起有懷鐵梅

間坐幽亭倒酒缸。病餘豪氣未全降。

儂教一幅煩高手。萬疊雲煙入小牕。(明治二十五年カ)

寄懷鐵梅

灣目波濤隔九州。劉郎未許再來遊。

依依情緒難忘卻。一度梅花一度愁。(明治二十六年カ)

があるし、明治二十六年秋から二十七年三月頃までの詩十数首には鐵梅の評語が記されてゐて、一竿が詩稿の一部を送り、朱批を求めたことが知られる。正に「日清戦争」直前のことである。

胡鐵梅からも、音信は絶えなかつた。

癖性嗜痴莫是癡。書生結習費尋思。

幾人得見風塵吏。海外馳書為索詩。

これには、「古今名吏盡風流」といふ黄百鍊の評語が附せら

れてゐるから、二十三・二十四年頃のものであらう。墨梅を描き、詩を題して贈つて来たこともあった。

題自畫墨梅

正是黃昏月上時。

山妻磨墨意遲遲。

知俱原有清孤癖。

不為梅花不做詩。

これにも、「畫中詩耶、詩中畫耶」と記す百鍊の評があるから、ほぼ同じ頃のものであらう。如何にも夫婦仲睦まじい姿を想はせる詩で、一竿も「清辭霏雪」と感じた。⁽²⁰⁾

季弟逸齋が、中須賀に家を新築したのは、何時の頃であつたか。

胡鐵梅から

逸齋新居落成、賦詩賀之

堂構相承倚絳霞。

階前水木闌清華。

春鶯早報遷喬喜。

城市山林自一家。

紫燕喧人倦捲簾。

吟巢雖小足留連。

新栽弱柳柴門外。

好繫米家書畫船。

と、壽いで来た。逸齋も、亦胡鐵梅を想うて止まなかつた。

寄懷胡鐵梅在上海。

凝望天涯日幾回。

茫茫海水接蓬萊。

雲邊帆影依稀認。

料是江南客棹來。

「戊戌政變」頃の詩でもあらうか。

「戊戌政變」(光緒二十四年八月十六日)明治三十一年九月一日、一八九八)は、胡鐵梅の生活をも、根底から揺がした。

所謂「戊戌六君子」は難に殉じ、康有為は英國船に投じて香港に遁れた後、日本に亡命する。梁啓超と王照は、折柄大陸漫遊を試みて北京に在った伊藤博文の秘令によって、数名の日本の志士に護られながら、太沽に停泊中であつた軍艦「大島」に逃げ込み、横浜に上陸した。保皇立憲派乃至は維新派の人々に對する弾壓の手は伸びて、比較的穩健な改革論者であつた張元濟ですら、「奉旨革職、永久不敘用」⁽²⁰⁾となり、言論界の重鎮として衆望を擔つてゐた「昌言報」の經理梁鼎芬の如きも、後事を安藤陽洲に托して上海を脱出せざるを得ず、安藤及び「亞東時報」の社主山根立庵に匿はれて、難を日本に避けた程であつた。彼は長く張之洞の幕下に在り、維新派と言っても寧ろ保守派に近い方だから、言論人の恐怖感は、推して知るべきである。「蘇報」は、夫人生駒悦の名で出されてゐたから、一応安全ではあるが、胡鐵梅の身邊には、危険が伴はぬ筈はない。神戸に引揚げた夫妻は、財産を失ひ、心勞と無理とが重つて、疲勞困憊してゐたに相違ない。悦女が明治三十二年(一八九九)四月

十五日に歿し、同年八月一日、胡鐵梅もその跡を逐ふ様に道山に歸してゐるのは、この間の無理が祟つたものであらう。そして、奇しくも、この年の冬頃三浦一竿も、白玉樓中の人となつた。

六

胡鐵梅が高知を訪れた明治十八年（光緒十一年、一八八五）は、清国にとつて多事多難な時代であつた。前年六月、安南（今日のヴェトナム）北部バクレ（北黎）で発生した清仏両軍の衝突に業を煮やしたフランス政府は、七月十二日清国政府に最後通牒を突き付ける。政府の指令を受けたフランス極東艦隊の提督クールベ（Courbet）は、八月二十三日清国の福建艦隊を一挙に殲り、同三十一日台湾北部の要港基隆を占領、十月二十三日台湾を封鎖、この年に入って二月に寧波を封鎖、三月末台湾海峡の要衝澎湖島を占領、更に機を窺つて天津を奪ひ、北京に迫る気配をさへ示した。この作戦は、クールベの病死によつて中断され、四月以降は休戦状態に入るが、その間を利用して、フランス艦隊の一部は長崎に入港停泊して、兵員の休養や物資の補給に當る。しかも、残餘の艦隊は依然大陸の封鎖を繼

續し、その一部は、遠くアリューシャン列島の付近まで遊弋して、東支那海や日本近海の潮流測量に、用意は怠りない。かの文豪ビエル・ロティの「お菊さん」(L'otie Madame Chrysanthème)が、この長崎での生活を素材とし、「水島の漁夫」(Pêcheur d'Islande)冒頭の二節に、アリューシャンの狂瀆に、ロティの兄シルヴェストル・モアンが攫はれる一節のあることは、越く人の知るところであらう。

一方、フランスと同盟を結び、不凍港を極東に求めてみたロシアは、この年―明治十八年四月、韓国との間に咸鏡北道の永興湾を租借する密約を結ぶ。これをいちはやく察知したイギリスは、同月十五日優勢な極東艦隊を以て巨文島を占據し、朝鮮海峡にも荒浪が起ち始める。密約に對しては、日清両国とも韓国に嚴重な抗議を行ふが、これは互に牽制し合つたもので、前年の「甲申事変」(金玉均・朴泳孝の乱)以来、日清両国の關係は次第に悪化して行く。

転じて、眼を日本の国内問題に移す。

胡鐵梅が来日した明治十五年（一八八二）から、高知を訪れた十八年（一八八五）までの数年間は、各地に不穏な事件が續發した時代であつた。明治十五年の「車會黨事件」・「福島事

件」(十一月)、十六年の「高田事件」(三月)、十七年の「群馬

事件」(五月)・「加波山事件」(九月)・「秩父暴動」(十一月)・

「名古屋事件」及び「飯田事件」(十二月)、十八年の「日比谷

公園爆弾事件」(春)等々。改正の手を加へて、次第に厳しく

なつて行つた「新聞紙條令」や「集會條令」に代表せられる絶

對主義政府の弾圧に、追詰められた自由黨員の一部が、地租改

正に喘ぐ小地主・農民を抱き込んで暴發した事件であつた。自

由黨員の中核には士族の者が多かつたが、「秩祿處分」を受け

て職に就いた彼等は、既に資産なき労働者であつたのである。

殊に、十七年の「大阪事件」の如き、自由黨左派の大井憲太郎

が、韓國の事大黨を打倒して、獨立黨を支援し、朝鮮民衆にも

自由平等を齎し、折柄の清仏戦争や緊迫した東亞の國際關係を

利用して、民権運動の再起を図つたもので、民権運動が國權論

及び國際主義との連関の上に、自らの活路を求めた特異な事件

であつた。しかし、此處まで来ると、都会の資産家、地方の大

地主を含めて、一般の大衆も離反して行く。自由黨内にも内紛

が起り、板垣退助や後藤象二郎の外遊に反対した大石正巳・馬

場辰猪(孤蝶の兄)・末広重恭(鐵腸)などは、連袂して脱黨

する。又、その資金の出處については、改進黨からも批判され、

両黨間に醜い論争が続く。今や統制不能となつて、板垣も解黨

の決意をせざるを得ない。

かくて、明治十七年十月、自由黨は解散し、その機關紙「自

由新聞」(明治十五年六月二十五日創刊)も、十八年一月頃に

は廃刊となる。「自由新聞」の別働隊として、十七年五月に創

刊された「自由燈」も、經濟的な支援者であつた星亨と意見の

衝突した坂崎紫瀾・宮崎夢柳が去つて、紙面は急に淋しくなる。

自ら「自由黨の別働隊」と称してゐた立憲改進黨も、總理大隈

重信・副總理河野敏謙と、嚶鳴社系の沼間守一・島田三郎及び

尾崎行雄との間に隙を生じ、十七年十二月には大隈・河野が離

黨し、一時は解黨寸前の危機に陥入る。

かうした民権派の足許を見透すかの様に、政府は御用政黨た

る立憲帝政黨に解散(十六年九月)を懲めて、民権派攻撃の鋒

尖を緩めると共に、「立志社事件」で十年の刑を受けた林有

造・大江卓・若神昂・藤好静などを特赦假出獄させ、十七年に

は板垣に爵位を与へて、民権派の懐柔に努める。既に、国会開

設の詔勅は下り、欽定憲法の草案作成にも着手したことが、こ

の餘裕を生んだものであらう。

かく、運動の面では一頓挫を來したが、自由民権の声が熄ん

だ訣ではない。明治十七年植木枝盛は高知に戻つて「土陽新

聞」に入り、言論によつて、運動の再建を図る。前々年の七月、

「高知新聞葬」(六日)・「高知自由新聞葬」(二十六日)と、二度に亘る新聞葬を催して氣勢を挙げた。こゝつ、そう達は、これを萬雷の拍手で迎へる。

此處に「自由民権運動」の歴史を繙説する暇はない。ただ、「愛国社」の結成(明治八年二月)から、「国会期成同盟」の時代を経て、「立憲自由黨」の成立を見るまで、運動の中心となつたのは、土佐「立志社」系の人々であり、その首領と目されたのが板垣退助であること、又、自由民権論者の教典ともなつたルソーの『民約論』(J.J. Rousseau: *Du Contrat social, ou principe du droit politique*, 1762)を訳出した中江兆民も、土佐の産んだ新知識人であつたことを、指摘するだけで十分であらう。

實に、土佐の高知は、当代の自由民権論者にとつてのメッカであり、エルサレムであつた。西南の役の後、それまで鹿児島に西郷を訪うて、その声咳に接するのを無上の光榮としてゐた天下の青年政客は、争うて高知に板垣を訪ひ、その自由民権論に耳を傾けることを誇りとした。福島の河野廣中・越前の杉田定一・三重の栗原亮一・岡山の竹内正志・福岡の頭山満・豊前の水田一二などは、その主要なる者、その数は百名を超えたとも伝へられる。

かうした空氣が、当時我が國に僑居した華僑間にも反映し、潜在的ながらも素地となつて、新思想吸収の突破口を求めつつあつたらうことは、想像に難くない。

論を原に戻す。

当代の民権運動家の姿勢に、幕末に於ける勤皇志士の投影が見られること、特に「獄中での吉田松陰や武市瑞山などの述志の文學は、まさに正氣の歌として、自由民権運動文學のなかに躍動して」ゐることについては、既に先學にその指摘がある⁽²²⁾。運動そのものも、「大阪事件」の頃から、國權論の抬頭・民族意識の昂揚とも絡み合つて、國際的な連帯を伴つて来るのは、上に一言した通りである。中江兆民が、上海に「東洋學館」を創立したのも、同じく十七年のことであつた。連帯の意識は、形・姿を変へながら、又、意識するとしないとに拘らず、水脈曳いて民間の所謂「東亜先覚志士」の心に流れて行つた。上に挙げた大石正巳・河野廣中・栗原亮一・頭山満等々がさうであるし、宮崎滔天の如きも、自由民権運動に感された少年の日を送つてゐる。しかし、何と言つても本場に育つた土佐派の人々は、その意識が鮮明であり、強烈であつたかと思ふ。光緒二十一年(明治二十八年、一八九五)の「廣州事件」當時から孫文

の盟友となり、生涯を中国革命と共に歩んだ荳野長知は、もともと自由黨員であり、彼に惹かれて孫文と板垣退助との会見を画策した和田三郎とは、竹馬の友であった。⁽²³⁾この時通訳に当り、荳野と共に孫文や黃興に従ひ、光緒三十三年（明治四十年、一九〇七）の「黃岡事件」「欽・廉事件」「鎮南関事件」と一連の革命工作に加はり、突戦にも参加した池享吉（雪齋）も、自由民権運動に早くから関係した人で、基督者でもあったのであらう、バンヤンの『天路歷程』(J. Bunyan: "The Pilgrim's Progress.")の翻訳や幸徳秋水事件に取材した小説「雁の便り」の作者としても、我々の記憶に遺る。餘り陽の当たらぬ逸事としては、中江兆民が曹汝霖（後年、交通総長・外交総長・財政総長などの要職を歴任）をその家に置き、⁽²⁵⁾坂崎紫瀾が汪兆銘（精衛。政界の大立物となったことは贅するまでもない）や今一人氏名未詳の女子留学生を寄宿させ、日本語から家庭の躰まで、熱心に教へてゐたといったこともある。

田中環堂や三浦一竿は、その職業からしても、矯激な民権論を振擧すことはなかつたであらうが、「土佐^ぢ方」の感慨を失ふ者でもあるまい。立志社に來學した頭山滿の出世私を許したばかりか、帰国の旅費までも与へた有名な「民権婆さん」を産んだ様な土地柄だから、その風土や民情が、胡鐵梅には暖か

く感ぜられたに違ひない。彼の土佐一遊が機縁となつて、華僑達の「高知詣で」が始まることは、上に一言した通りである。十餘年の後、茲に「松下村塾」を訪れることが、清国留學生間に流行するが、当代に於ける華僑の「高知詣で」は、その先蹤を為すものと言つてよい。胡鐵梅は、料らずもその先頭に立つてゐるのである。

(注)

注1 胡鐵梅夫妻の墓は、二度改葬された。追谷墓地のそれは、二度目の墓で、現在は更に移されて、神戸市長田区龍谷町一丁目十三番地、中華義荘の管理する華僑墓地に在る。胡鐵梅の墓碑は、表に

清江南名士胡鐵梅先生墓

塚知心泉迂納謹書

とあつて、北方心泉の書。夫人の墓には、

生於明治元年八月十八日

卒於三十二年四月十五日

於戲有和女士上海蘇報館主生駒悅君之墓

杖期生堯城胡鐵梅拉派拜題

とある。

注2 正しくは、浙江省嘉興府秀水縣の人。近くであるから、通りのよい蘇州を挙げたのであらう。陳曼壽、名は鴻誥、字は曼壽、乃亨翁と号した。永く西京に住んだから、関西の文人に馴染が深い。網著に「日本同人詩選」四卷（明治十六年三月刊）が

ある。

注3 葉松石、名は埜、字は松石、夢鷗と号した。浙江省嘉興の人。明治七年（一八七四）二月、東京外国語学校に語学教師として招かれ、二年の任期を半年延長して、九年七月に退いた。

彼は職務に忠実熱心な教師で、文部省が特別賞與を下付した他、古漆松鶴齋・硯紙匣各々一を贈ったのは異例のことである。その受業生からは中田敬義（雪莊）はじめ、後年外交官として活躍した多くの人がある。彼は又、詩を善くし書画共に巧みで、顯官・文人とも広く交ったので、帰国の際は連夜送別宴が催され、その留別詩が「朝野新聞」（第八五六号。明治九年七月七日）に掲げられると、唱和する者が暫く続いた。帰途京都に遊び、神戸に滞在して関西の文人とも訂盟するが、それらの詩を彙輯したのが「扶桑題唱集」で、光緒辛卯（十七年）仲冬上梓された。取めるところ、小野湖山・森春澗・大槻盤溪・中村敬

宇・成嶋柳北以下四十六人、詩は葉松石の自作をも含めると、二百首以上にもなる。又、帰国の際、松平慶永は上杉謙信の所持した長谷部国重の名刀を、大河内輝登は米田俊の名刀を、有馬道純は備前（長船か）の匕首を、福岡某（後の文部卿福岡孝弟）は正宗の名刀を贈り、「彼国贈刀、禮至隆也。所贈並古製名品、僕本非才、恥斯厚貺、洵為奇遇」と感激させたが、さうした楽しい思ひ出が忘れられず、再度の来遊となったのである。

再度来日した葉松石は、当初大阪に住み、翌十四年京都に移って、文墨の生活に入り、傍ら「夢鷗語」（明治十四年五月、大阪・柏原政次郎刊）を著した。が、京の客舎で突然咯血、大阪中の島の「自由亭」に引揚げて、療養生活に入った。その間、

徒然の余り書いたのが「煮葉漫抄」（光緒十七年冬、金陵刊）二巻である。この時分、彼の面倒を最もよく見たのは福原周峰で、右の二書が上梓されたのも、周峰の陰の功績が大きい。

郭少泉、名は宗義、字は小泉とも言った。陳曼壽と同じく嘉興府秀水縣の人である。屢応義塾の中国語教師となったが、教授法が下手で、学生から疎まれ、失意の裡に帰国したらしい。

注3 外務省記録F10、F13。ユネスコ東アジア文化研究センター編「資料御雇外国人」（小学館、昭和五十年五月刊）四八三頁に拠る。

注4 「大日本外交文書」第十卷三九一―三九二頁。

注5 前掲「資料御雇外国人」四八七頁。

注6 大河内文書「漆園筆話」拾、明治十三年十一月九日の条。

注7 「東京横濱毎日新聞」第三二八六号―八七号、「滄海拾珠」欄。明治十四年十二月六日―七日。

因みに、王治梅は、はやくから東本願寺上海別院と関係があった。明治十年五月二十二日、四馬路の「聚豊園」で岳崎正純師の送別宴が開かれた時も、銭子琴などと同席してゐて、岳崎師の「支那在勤棟志」には、「王寅。字治梅。金陵人。當時画家大名家」・「錢惺。字子琴。吳中人。儒士。善書」などとある（「東本願寺上海開教六十年史」〔同上海別院刊。昭和十二年六月序〕・「資料篇」二六九頁）。虹口に別院の新屋が成り、報恩講の準備も忙しい明治十六年十一月十四日、筆墨商馮鼎三と共に訪れ、本堂に額の寄進を申し入れてゐる（同、二七八頁）から、餘程関係は深かつたらしい。この来日にも、東本願寺が便宜を与へてゐるかと思ふ。

注8 實藤惠秀「王治本の金沢での筆談」・「王治本の日本漫遊」
〔近代日中交渉史話〕所収。

注9 「松ヶ枝賢哲師懷舊談」〔東本願寺上海開教六十年史〕・
「資料篇」二二七頁。

注10 實藤惠秀「姚文棟ものがたり」〔明治日支文化交流〕所
収・佐藤三郎「日清戦争以前における日中兩國の相互同情傾
察について」〔近代日中交渉史の研究〕所収。

注11 「新聞集成明治編年史」第五卷二〇七頁。

注12 王宗園「田中文仙伝」〔江漁晚唱集〕附録)

注13 「江漁晚唱集」王宗園序に附載する三浦一竿の伝・寺石正
路「土佐偉人伝」一一〇―一一一頁。

注14 北陸の某温泉宿に、「乙巳六月、為益齋契正之。心泉蒙左
手書之」といふ為書を有つ「夕陽紅半樓」の扁額があり、本岡
氏の「北方心泉」の口絵図版五八に収める。宿の主人の先祖に
益齋を号した人はなく、その様な人物もないとの事である(本
岡氏示教)から、市場に出たものを求めたに違ひない。乙巳は
明治三十八年で、前年心泉は腦溢血で倒れて右手の自由を失ひ、
この年の七月に入寂する。謙山の書齋に懸つてゐた額とこれと
別物であることは明らかである。神田香巖にも「夕陽紅半詩稿」
がある。室名の一致は偶然なのか。

注15 高知県人名事典編纂委員会編「高知県人名事典」(高知市
民図書館。昭和四十六年十二月刊)。

注16 神田喜一郎「日本書道史」一一一(「書道全集」第二十五卷、
「明治・大正」。平凡社、昭和三十二年十二月刊)・神田喜一郎
「中国書道史」、岩波書店、一九八五)、その他。

注17 辻樸一「明治詩壇展望」〔漢学会雑誌〕昭和十三年十二月、
同十四年四月。筑摩書房版「明治文学全集」六二「明治漢詩文
集」所収。

注18 上掲「資料御届外国人」四八八頁。

注19 一竿の原韻に、この句がないのは、後に訂正されたか、他
に疊韻された詩があったことを示す。尚、「高城唱玉二編集」
に収める詩と、「江漁晚唱集」に附録されたそれとの間には、
詩句に相異があるが、今は前者(初稿)に従つた。

注20 一竿の許に尚数点あったことは、「鐵梅画梅題詩、賀岡義
韃不感拜」〔江漁晚唱集〕坤卷)によつても知られる。

注21 湯志鈞「戊戌変法人物伝稿」(中華書局、一九六一)上冊
九四―九八頁。

注22 柳田泉「自由民権意識に成る詩歌」〔統隨筆明治文学〕春
秋社、昭和十三年)・岡林清水「自由民権運動文学の研究」(高
知市民図書館、昭和四十八年刊)。

注23 對支功勞者伝記編纂会「統對支回顧録」下巻。

注24 前掲「高知県人名事典」

注25 後年、曹汝霖氏が、北京に在つた兆民の嗣子中江丑吉の面
倒を何くれとなく見たのは、兆民への思慕に報いた日中友好の
佳話として、今日尚伝へるところである。

〔附記〕本稿を執筆するに当つて、吉野忠・本岡三郎氏の示教を
頂いたこと、又、資料の蒐集には、高知県立図書館の方々、甲
南女子大学図書館司書藤井博子氏などに、色々御協力頂いた。
銘記して感謝の意を表する。